

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 5 月 13 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	井上 湊太

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
宮崎県串間市幸島、都井岬
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
幸島実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 5 月 4 日 ~ 平成 28 年 5 月 12 日 (9 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
幸島観察所、鈴木氏
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回は幸島実習として、ニホンザル、ウマの行動観察を行うため宮崎県串間市に位置する幸島、都井岬を訪れた。
実習日程 5月4日 フェリーにて大阪南港から鹿児島県志布志港へと出発。 5日 志布志港から宮崎県串間市へと移動し、幸島観察所にて準備を行った。 6日-8日 幸島にてニホンザルの行動観察 9日 都井岬にてウマの行動観察 10日 データ解析、発表会 11日 観察所掃除、志布志港へ移動の後、南港へとフェリーにて出発 12日 大阪南港着、帰京
私は今回の実習にて「幸島のニホンザルは Levy Flight モデルに従うか」というテーマにて行動観察を行った。Levy Flight モデルというのは最適採餌戦略とされる動物の移動に関するモデルである。餌を探索する際に短い距離の移動のみを繰り返すと、同じところを探す可能性が高まり、徐々に餌の探索効率が低下する。そこで低頻度で長距離の移動を挟むことで餌の探索効率を上昇させることができる。 現在、アホウドリやトナカイ、ミツバチなどでこのモデルが報告されている。今回の対象である幸島のニホンザルは小さな島という限られた土地しか移動することができない、さらに自分の行動がランクの影響を受けやすい、餌付されているなど特殊な条件下に置かれており、モデルに当てはまるかどうかに興味を持った。 このモデルを検証するためには動物の移動距離を測定する必要がある。ニホンザルに直接 GPS を装着することはできないので、自分で GPS を所持し個体との距離を一定に保ちながら個体の追跡を行った。 3 個体に対して追跡を行った。その結果、2 個体についてはモデルに当てはまる結果は得られなかったが、1 個体についてはモデルに当てはまる結果が得られた。この 1 個体は高ランクのメスであった。当てはまらなかった 2 個体については低ランクまたは中ランクの個体であった。したがって、モデル通りの最適な行動を示すためにはランクが影響している可能性が示唆された。ただ、この仮説を検証するためにはより多くの個体追跡、またはデータの解析方法を改良する必要があるだろう。 砂浜での個体追跡は非常に容易であったが、ひとたび森に移動するとニホンザルとの移動速度についていくことが困難になった。想像していたよりも傾斜のある地形で、坂を登られ見失うケースが多かった。傾斜を登ったり降りたりする際のルート選択や手の使い方などに奥深さを感じ、個体観察とそれらを並行して行うことは非常に難しく感じられた。 学部生時代は決められたことをルーティンとしてやる研究・実験が多かったので、テーマの設定から方法まで自分で考え、実際にデータを取り、解析し発表するという流れは非常に良い経験で新鮮なものであった。私にとっては初めてのフィールドワークということもあり、動物たちを間近で観察し、頭だけではなく自分の体を使ってデータを取ることに難しさや面白さを感じることができた。 今回の実習では 6 日と 8 日に雨が降り、波も高いという悪天候の中で行われたので観測所に予定より 1 日早く戻った。雨が多かったことは残念であるものの、なかなか体験できない良い経験と捉えることもでき、一日中雨が降る中、野外でサルを追いかけることはある意味非常に貴重な経験であったと思う。

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

都井岬では野生ウマの観察を行った。本格的なテーマ設定を行い研究をしたわけではないが、自分なりの視点から観察できたと思う。しかし、サルに比べて予備知識にかけていた部分があり、自分で面白いと思うような見方はできなかった。

全体を通して今回の幸島実習においては、自然に囲まれた中で多くの時間を過ごし、改めて自然の良さを感じることができた。初めはなかなか個体識別に苦労したものの徐々に顔の違いや性格などを捉えることができ、一人一人の個性について興味深い印象を持った。また、幸島のような野生動物の観察を間近で行うことのできる場所を保全していくことの重要性を強く感じた。



浜にてグルーミングを行うニホンザル



都井岬にて当歳馬



岩場までサルを追いかけて



鈴木さんと実習参加者

### 6. その他 (特記事項など)

今回の実習を行うにあたりまして、長い間指導して下さった中村先生、杉浦先生、鈴木さんには大変感謝しております。また、実習の開催に協力していただいた PWS にも同じく感謝しております。